徳倉小学校区　きずなづくりトークの意見概要と方向性　　10 月 5 日　北上文化プラザ

地域	現況・課題	方向性・対応
幸原	○訓練では1次避難・2次避難のみで、小学校への最終避難は行っていない。 ○参加者は約300人だった。 ○参加者に、火の元やガスの元栓、飲料水、非常持ち出し品、近所の要援護者について確認してもらい、その集計をとった。 ○AEDは他の自治会と訓練が重なって使えず、消化器と三角巾、応急担架の訓練をした。 ○地震の発生する時間によって、火事が発生する可能性が高まる。 ○避難所へ行けば必要な物資を得られるので、「まずは避難所に逃げる」ということだけを覚えるように指導している。避難所に来た人の中で、元気な人を集めて救助に向かわせる。 ○1次避難所が小さいので、消化器訓練や炊き出しなど大掛かりな活動ができない。	○参加がわずらわしいという理由で老人会に出ない人が多いが、地域の仲間が集まれば情報も集まってくる。老人会をもっと利用してもらいたい。（幸原幸栄会）
	○1次避難所に集まった人に、避難するときに要援護者とどこで出会ったかを確認し、数人ずつに救助に向かってもらう。	○芙蓉台では運びやすい担架を新たに購入した。車椅子を使用している自治会もある。（市長） ○徳倉ではリヤカーを利用している。幸原でも購入したい。 ○要援護者を誰が助けるかをあらかじめ決めておく必要がある。配布したリストを参考にして考えてほしい。（市長）
徳倉第2	○他の町内会と一緒に、例年徳倉小学校内で訓練を行っている。 ○参加者は110名だった。 ○市から16万円の補助を頂き、自家発電機や救急箱にあてた。発電機は1次避難場所の集会所で活用したい。 ○来年以降、中身を充実させたい。	○常日頃から要援護者を見守る見回り隊のようなものを町内会で構築したい。 ○近所にどのような人が住んでいるかの確認をしていきたい。
徳倉第3	○今までは1次避難した後に小学校へ避難してもらっていたが、今年は放送をして、各自小学校へ避難してもらった。放送では、火の元の点検を呼びかけた。 ○人数は去年と同数程度だった。	

徳倉第4	○組単位で1次避難した後に避難場所へ集合し、AED、三角巾、担架、消化器の訓練を行った。 ○去年は43名だったが、今年は84名似た倍増した。そのうち中学生3名、高校生2名と学生の参加は少なかった。	○住民の意識が高くなり、参加者が増えている自治会が多いようである。全く無関心の住民もいるので、どうやって参加させていくかが課題である。
	○市から愛の笛を頂き、55件の要援護者に渡してきたが、家の外に出てきてくれない。家庭にこもっている人が多い。	○周辺住民に、愛の笛の存在を周知させてほしい。また、助けるときの手立ても考えていってほしい。芙蓉台の取り組みが参考になる。（市長） ○愛の笛を要援護者に配る際、組長や民生委員など顔見知りの関係者も連れて行くと、家の外に出てきてくれるかもしれない。（民生委員） ○三島市内でも孤独死が日常的に起こっている。防災対策に取り組む際に、そのような問題についても考えていってほしい。（市長）
徳倉小	○地域の方には登下校の見守り、運動会など大変お世話になっている。 ○小学生たちは運動会には大勢参加しているので、防災訓練の参加率を上げる方法もあると思われる。	○土日に行われる参観会のように、防災訓練を丸1日授業としてあて、代休を設けることができれば、全員参加が可能になる。 ○今年、北小が防災対策の研究校となり、PTA主催の訓練が行われた。地域の人を巻き込んだ防災対策を行っていくために、PTAの方々にもご協力をお願いしたい。（市長）
全体	周辺の状況・避難場所の確認	
	○徳倉地区の避難場所の表示や掲示板がない、またはあっても見づらい状態である。避難場所を知らない人にとっては問題である。訓練の前に、そういった初歩的な部分も見直さなければならない。（環境美化推進委員） ○徳倉小付近には8m以下の道路が多い。災害時に利用できないのではないか。（子ども会連合会） ○徳倉小付近は、以前は葦の生えていた湿地帯なので、液状化が起きる恐れがある。それを踏まえた防災対策を行うべきである。（子ども会連合会） ○表札のない家が多い。家主もどんな人が住んでいるか分からない状態である。（子ども会連合会）	○けが人や要援護者の把握をしたいので、災害が発生したら全員1次避難所には行ってほしい。その後に、自宅で生活できない人のみ避難所に向かってもらう。（危機管理課） ○以前、台風が襲い全地域の水道が止まったとき、徳倉3丁目の市営団地にある井戸からは水が出ており住民が水を汲みに来ていた。他にも水が出る場所が存在するので、ハザードマップにまとめたほうがよい。（子ども会連合会）
	各団体の組織の整備	
	○老人会、子ども会の参加者が減ってきたのは、地域の集まりへの参加が面倒と思う人が増えてきたためである。しかし、小さな規模の集まりでは住民同士で旅行に行くところもある。（キッズクラブ）	○町内会と民生委員の連携が大切である。（市長） ○訓練に参加する人が少ないということは、地域力がないということである。校区みんなで助け合っていく方法を話し合っていただきたい。「自らの命は自らで守る、自分たちの地域はみんなで守る」ことを呼びかけていってほしい。（市長）

	○災害時には、救助にあたる消防隊員や救急車の数が必ず追いつかなくなる。自主防災会で対応できるように考えていってもらいたい。（市長） ○魅力のある集まりを企画しなければ、地域でまとまって活動することに抵抗を感じる住民は参加しない。（キッズクラブ） ○昔は隣組の会合が年に何回かあったが、今は1年に1回もやらない状態である。復活させ、人とのつながりを増やすべき。（徳倉第3） ○日頃からまとまりがある地域は、災害が起こったときにとても強い。３．１１の震災時に被災地を訪れたとき、小さな集落ほどまとまって協力し合っていると感じた。マンション単位、組単位の小さな組織での活動がまず重要である。（キッズクラブ） ○いろいろな組織が連携する前に、組単位の小さい組織をしっかりさせるほうが先決なのではないか。（民生委員） ○いかに最小単位の組織でやっていくかが重要。（徳倉第3）	○組長にも取り組み方に温度差があり、それをまとめていくことは難しい。机上論ではなく、実際に起こっている問題の解決策を考えていくべきである。（徳倉第3） ○今後、市から町内会に手厚い支援はできなくなる。それぞれで、「自分の地域は自分で良くしていこう」という意識で活動していってほしい。（環境推進部） ○小学校区は運動会などで地域のまとまりができているので、統一感を高めようとこのような場を設けた。小さい規模の付き合いが大事であるので、そこからスタートさせて地域を結び付けていきたい。（環境推進部） ○市のほうからは、人の集まるサロンのような場所づくりという形などで支援していきたい。（環境推進部） ○地域づくりコーディネーターが地域の課題を見つけ、結びつけていってほしい。今後も小学校区単位の集まりを続けていきたい。（環境推進部）
	訓練等の実施	
	○皆さんの意識が高まってきており、AEDの講習など中身も充実してきている。（消防団） ○防災訓練では、小地域のつながりが大切。日頃の付き合いなくして地域の団結はない。（幸原幸栄会） ○防災訓練の回覧を見ても、忘れてしまう人やどこに避難するかも知らない人が多い。（環境美化推進委員） ○若者の訓練参加率が悪い。（民生委員） ○「自宅が安全であれば避難する必要はない」と呼びかけてしまうと、避難訓練に参加しようと思う人は少なくなるのではないか。パンフレットを見ると、避難するかどうかの基準を自宅の耐震性に特化しているように感じるが、水道が止まるなど別の要因で避難を余儀なくされる地域もある。訓練への参加を促すには、避難所に来ないと必要な物資が得られないことを強調した方がよいのではないか。（市子ども会連合会）	○訓練は必ず参加するものにしたい。（幸原幸栄会） ○運動会に子供たちが参加するのは、子ども会の協力があるためである。防災訓練にも参加させるには、子ども会の理解を得ることが重要。無理のない範囲で協力していく必要がある。（三島市子ども会連合会） ○徳倉小学校の生徒を、授業の一環として訓練に参加させてほしい。（消防団） ○三角巾の講習などマンネリ化してきている。小学生が三角巾の使い方を覚えて住民の方に教える、などの方法を取り入れるのも活性化につながるのではないか。（消防団）

	要援護者の把握	
		○災害時に、要援護者をまず家から出す方法を、その家族や近隣住民が考えなければならない。その流れを実際に訓練した方が良い。（民生委員）
	物資、資材の備蓄・点検	
		○自宅が安全であれば、避難する必要がない。避難場所である徳倉小に全員が入るスペースはない。自宅の耐震補強、3日分の食料の準備をしてほしい。避難する際には運営にも協力していただきたい。（市長） ○小さな集落には水と食料が届かない。行政は小さな集落にも配慮しながら配給のシステムをつくってほしい。（キッズクラブ） ○被災者に話を伺うと、車中泊のためのガソリンや、現金が足りなくて困っていたことが分かった。震災で実際に必要となった物資を、日頃から準備するように徹底させたほうがよい。（三島市子ども会連合会）